慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	清水三男著 中世荘園の基礎構造
Sub Title	Basic structure of "Shoen" by M. Shimizu
Author	服部, 謙太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1950
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.43, No.3 (1950. 9) ,p.204(68)- 208(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19500901-0068
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19500901-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

評書

清水三男著『中世莊園の基礎構造』

服部謙太郎

一

日本史を貫く特質として地域差の問題が最近大きくとり上げられているが、日本封建社會の構造を發展的に把握するためには、この問題の解明は不可避の課題であると思われる。封建社會の全過程を通じて生産力の最も高度に發達したのは常に畿内地方であつたが、歴史の中心は必ずしも常に畿内にあつたのではなかつた。最初の封建權力としての鎌倉政權は東國を地盤として成立しているし、戰國を統一した信長・秀吉・家康の政權は東海地方から出現する。地域差の問題は單なる生産力發展の不均衡のみから單純に説明しつくすことは出來ず、かゝる不均衡をもたらした當時の社會關係の分析にまで深められねばならない。

從來の封建社會研究にあつては、やゝもすると日本全土を一色にぬりつぶし、畿内地方を中心とする先進地と、邊境の後進地との史料をアトランダムに引用して、その時代の全般を説明せんとする傾向が強く、そのために或る時代についての評價が人により著しく異り、そこに多くの異説が對立する結果となつた。たとえば封建的土地所有の成立時期についてみても、平安中・末期にこれを見んとする清水三男氏の説と南北朝以降にそれを求めんとする松本新八郎氏の説とは一應對立するものと思われるが、この場合にも清水氏が畿内地方にのみ史料を求めるのに對し、松本氏が紀伊や出羽の如き邊境地方の記事を援用して自説を裏づけんとしている點に注意しなければならない。日本の封建社會の成立と發展の過程を正しく跡づけるためには、發展段階を異にする畿内と邊境の史料を混用して、早急に一般的結論を出すことは許されないのであつて、一應はこの二つの世界を別個に考察した上で、兩者の相互聯關を通じて全體の把握へと進まねばならないと思う。そのためには吾々はどうしても一つの地方の歴史を各時代を通じて辿ることによつて、その地方の社會構造の變化を具體的に知ると共に、それがその時代の社會全體の中にあつて、いかなる歴史的地位を占めるものであるかを追究しなければならない。

ところがかゝる長期間にわたつて史料の殘存するのは社寺の莊園文書を除いてはないのであるから、莊園の個別研究こそこの課題に答えうる唯一のものというべきであろう。しかるに古くから行われていた莊園研究は必ずしもこの期待に沿うものではなく、傳領關係の叙述や、内部組織の個々の説明に終始するものが多かつたのであつて、眞に莊園を構造的に把握し、その中に動く各階層の分析を通じて、具體的にその社會構造を描き出した研究は、昭和七年以降、清水三男氏の學界への登場をまつて初めて行われたということができよう。

二

本書はかゝる清水氏の莊園についての個別研究を初めとして氏の代表作「日本中世の村落」の基礎をなした數多い實證的研究のすべてを收録した論文集である。全部で二十編の論文は二部に分たれ、第一部は主として概括的な十編を、第二部は個別的特殊的な十編を收めている。それらの大部分は今日の水準からみても、なお高い學問的價値を有するものであるが、こゝにその一々を紹介するいとまはないから、第二部の十編中の六編を占める東寺領莊園の研究について檢討を加えるにとどめたいと思う。この六編を特にとり上げる理由は、東寺領莊園の個別的研究こそが、氏の研究の出發點であると共に、それによつて得られた結論は、その後の氏の見解を強く規定しており、その意味ではこの六編の論文が氏の代表的論文と考えられるからである。清水氏はこの六編の中で五つの東寺領莊園をとり扱う。（大山莊のみ二編）。即ち若狹國太良莊、播磨國矢野莊、丹波國大山莊、山城國拜師庄、伊予國弓削島莊。いづれも東寺百合文書中に最も多く現れる重要な莊園であるが、以下氏がこれらの諸莊園の研究を通じて得た結論を總括して示し、且つ氏の見解がその後の學界によつていかに發展繼承され、もしくは否定されたかを檢討して、本書のもたらした功績とその限界とを明らかにしたいと思う。

（1）『名主は耕作農民でなく地主である。』（太良莊について實證）名主＝地主説は中田薫氏により提起されて以來、清水氏がこれを普衍し説明するまでは、殆んど歴史學界のかえりみるところとならなかつたのであつて、その意味で今日一般の通説となつているこの見解の樹立は、清水氏の第一の功績であること論をまたぬ。ただ氏が名主を地主と規定するに止まつて、地主の性格それ自體を深く追及しなかつ　ところに問題があると思う。氏はその後の「日本中世の村落」に於いても、「名主的經營は名子小作を最初支配的とし、普通小作が次第に力を得てくる」として、鎌倉から室町への見透しを持ち乍ら、「名主の名子制が十分の史料を與えられていないから」とて、それ以上の追及を放棄している。室町時代の名主―作人―下作人の分化が單なる職の分化であつて、階級の分化でないという見解が強くなつてきた今日、土一揆の主體となつた如き名主が、果して清水氏の考える如き「普通小作關係」を中心とする、純粹に封建的な地主であつたか否かは相當疑問のあるところであつて、

むしろ下人名子的な勞働力をその下に持つ、農奴主的な古い土豪ではなかろうか。近世初期に支配的とされる地主手作經營との關聯を考えるとき室町期の名主＝地主の性格が、更めて考え直さるべき時がきているのではないかと思う。

（2）『名主は多く武士であり、これが莊園内に於ける指導的勢力である』（矢野莊、大山莊について實證）。氏のいわゆる地侍重視說が、名主＝武士の勢力を大きく評價したことは、柳田國男氏の說を繼承したもので、疑いもなく正しいのであるが、この場合にも氏が武士を一色にぬりつぶして武士の性格自體の分析にまで進まなかつたのは惜しい。武士にも古代家族の系譜を引いた舊い武士と、名主の分解過程から生じた新しい武士とがあるわけであり、後者が戰國大名に上昇する過程の中に純粹封建制が形成されてゆくのであるが、その點についての氏の理解は今日からみれば不十分といわざるを得ない。更に氏は武士相互の對立を重視した結果、かゝる武士＝名主と、莊園領主を代表する雜掌公文等、幕府權力を背後にもつ地頭、守護等、更にその下の一般農民との三者がいかなる關係にあり、いかなる鬪爭を行つたかについて必ずしも明瞭にしていない。武士と農民が賦役勞働をめぐつて對立するか、或いはこの兩者が相結托して莊園領主に反抗するかという點こそ、封建社會形成過程の大きな問題であるのに、清水氏はこの點については餘りふれていない。

（3）『莊園と現實の村落とは異る』（拜師莊について實證）。日本の莊園が英吉利のマナーと異り、單なる領主の徴稅單位にすぎず、中世社會の現實の場は名田であることを指摘した點は、その後の中世史研究の出發點をなしたものであつて、劃期的な業績であることは何人も異論のないところであるが、一面、名田と名主とを强調する餘り、莊園という機構のもつ政治的權力を輕視する結果となり、そのために古代から中世への過渡期に於いて莊園のもつ歷史的意義を正しく評價し得なかつたという缺點が生じたのも事實である。名田を地盤とする名主の成長が決して莊園と無關係に行われたものではなく、莊園領主への反抗の過程の中から生じたものであることを無視しては、中世をになう名主＝武士の性格も亦明白にならないと思う。この點について石母田正氏はその著「中世的世界の形成」に於いて、莊園領主としての東大寺のもつ古代的權力の分析を行つたのであるが、東寺の領主としての性格は、東大寺のそれとは著しく異るものであり、一口に古代的の名の下に一括することは許されないのであつて、東寺の莊園支配機構を具體的に追究することは今後にのこされた課題の一つであろう。

（4）『莊園内の田地は多く散在錯圃形態をとり且つ農民一人當りの耕田數が極めて少い』（太良莊について實證）。清水氏のこゝに指摘した第一の點、耕地の散在性については、その後これが口分田の散在性によつて生じたとする清水氏の推測を實證した石母田氏の研究や、又これが農民の領主からの束縛を脱する上に大きな役割をなしたとする松本氏の說を生んで、中世史學の進歩に寄與した點は、こゝに述べるまでもないが、第二の點、即ち農民一人當りの持分が小さいという指摘は、その後鈴木良一氏や今井林太郎氏によつて强調され、いわゆる五反百姓說として、土一揆の原因をかゝる小農民層の窮乏に求めんとする說を生ぜしめたのは、問題のあるところである。なぜなら一莊園内の某の持高がその人間の全持高であるとは限らず、他の莊園公領内にも耕地を有する可能性は頗る多いのであるから、一莊園の檢注帳からのみ百姓の持高を考えることは頗る危險だからである。中世農村の構造を知るためには、吾々はどうしても莊園文書に賴る他ないのであるが、その際莊園機構のもつ特殊な性格と、その機構のために作られた文書が現實を示しうる限界とを、常に念頭からはなしてはならない。

（5）『莊園は封鎖經濟を行うものではない』（弓削島莊について實證）。莊園が封鎖經濟を行つたものでなく、莊園を越えて廣く商業が行われたこと、そしてそのトレーガーは莊園領主ではなく名主階級であつたことも、また清水氏の立證したところである。たしかにこれは重要な指摘である。然し更に重要なことは、かゝる商業が封建社會の成立と發展の途上に於いていかなる役割を果したかという點にあると思う。商業史は日本史の部門史中でも、古くから研究の進んだ分野であつたが、このような視點から問題が把えられていないために、それが單なる市場や問屋のせまい視角にとぢこめられ、封建社會の構造變化との連關に於いて考えられなかつた點に缺陷があつた。室町期の商業の發展が農民相互の横の連絡を可能にし、土一揆の大きな原動力となつたと同じ意味に於いて、清水氏が弓削島莊を通じてみた如き平安鎌倉期の商業が、封建社會の成立の上に、いかなる意味をもつたかを追及することは、これも亦今後解明すべき問題の一つであると思う。

三

以上見てきた如く、清水氏が五つの莊園について實證した五つの見解は、いづれも中世史研究のその後の進展に決定的な貢獻をなしたものであつたが、同時にそこには當時の封建社會の研究史の段階に制約されて、次の二つの根本的な缺陷を、今日に於いては指摘することができる。

その一つは、氏は莊園文書を通じて中世の農村を構造的に把えることに成功したが、發展的に把えることには必ずしも成功していないということ。即ち鎌倉、南北朝、室町の各時代の社

會構造の變化を全體として把握することが弱いために、中世を一色にぬりつぶしてしまう傾向があるということ。いま一つは農村の內部構造の究明にとどまつて、その村落が日本全體の中に於いて持つ地域的な特殊性や、社會全體の發展段階の上に於いて占める地位といつたものに對する考慮が少いことである。例えば氏の扱う五つの莊園の中、一つは畿內であるが、他の四つは畿內周邊もしくはそれと同樣の性格をもつ地域のものであり、それらは古代權力の重壓からは比較的開放されており、しかも關東の如く遲れた地方ではなく、生產力的には先進地であること、したがつて農奴制の最も容易に成長し易い場所であること、かゝる地帶に於ける村落が封建社會の全構造の中でいかなる歷史的意義をもつかという點に至つては、氏の考慮の外にあるといわねばならない。吾々はこゝに清水氏の業績の偉大さと共に、その限界をもはつきり認めることによつて、この論文集の研究史上に於いて占める位置を正しく評價し、その遺產を繼承發展せしめることによつて、今後の研究の進步に寄與せねばならないと思う。

（一九四九、七、二五）

學會會員に關する附則

本會に特別會員と贊助會員をおく。

一、特別會員　慶應義塾關係者で本會の主旨に贊同し、會員二名以上の推薦と委員會の承認を得た者。但し年額金千二百圓の會費（二期分納も可）を納める者。

一、贊助會員　本會の主旨に贊同し委員會の承認を得た者。但し年額三千圓以上の贊助金を據出する者。

特別會員及び贊助會員は、會則第三條に規定された諸事業に參加し、機關紙「三田學會雜誌」の無料配布を受けることができる。（會則は本誌第四十三卷第一號または第二號所載）

右附則に基き委員會の承認を得た新入會員

贊助會員　星月玉三　佐々木春雄
　　增川弘平　濱忠次郎
　　井田正一　塚田一夫
　　石橋進一

特別會員　上西泰藏（農林省水產廳・勤務）
　　高橋伊一郎（農業綜合研究所・勤務）

編集後記

○經濟學は、その性格からいつて現實から浮き上つた理論であつてはならない。理論的分析と實際問題の研究とは、つねに併行してゆかねばならない。復刊後の三田學會雜誌は、第一號第二號ともにこの趣旨に沿つて編集してきたが、今回もこの趣旨に基ずいて山本敎授の「アジア貿易の分析と展望」を卷頭論文とした。日本經濟の安定と復興の鍵は、貿易がどの程度に伸び得るかと云うことにある。國內經濟の諸施策はもとより重要ではあるが、今後の日本は封鎖經濟の形で復興して行くことは不可能である。そうしてその貿易の相手國として、最も距離的に近いアジア諸國の經濟狀態が、わが國の貿易、ひいては經濟復興に影響するところは少くないであろう。日本經濟の實際問題を研究する人々は勿論のこと、純粹經濟理論に關心を持つ人々も、その理論が「宙に浮いた理論」にならないためには、是非一讀していただきたいと思う。

○續く二論文には、植木、富田兩君の勞作を掲載した。哲學的思想的諸問題に興味を有する讀者にとつては、好箇の參考資料となるであろう。經濟學が技術論に墮して、社會科學としての意味を失う樣になつては、その本來の使命は達せられ難いと思われるからである。

（鈴木諒一）

昭和二十五年八月二十五日印刷　第四十三卷
昭和二十五年九月一日發行　第三號

本號定價　金七拾圓
送料　六圓

編集兼發行者　東京都港區芝三田慶大經濟學部內　高村象平
印刷者　東京都千代田區神田多町一ノ七　大橋政雄
印刷所　東京都目黑區平町一六六　富士精版印刷社

禁轉載

豫約購讀料一年分　金八四〇圓（送料共）
半ケ年分　金四二〇圓（〃）
豫約購讀料は發賣所宛お拂込み下さい。
誌代變更の場合は精算決濟致します。
編集に關する用件は發行所へ。
營業に關する用件、購讀申込は發賣所へ願います。

發行所　東京都港區芝三田二丁目　慶應義塾大學經濟學部研究室內　慶應義塾經濟學會
發賣所　東京都新宿區角筈一丁目八二六番地　紀伊國屋書店
日本出版協會員A一一一〇一九　日本出版協會員B一一一〇一六